関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

清末上海の出版界と書店について

その他のタイトル	The Publishing Community and Book Stores in Shanghai (上海) in the End of Qing (清) Dynasty
著者	一ノ瀬 雄一
雑誌名	史泉
巻	71
ページ	A1-A25
発行年	1990-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00025688

清末上海の出版界と書店について

一ノ瀬　雄　一

1. はじめに
2. 上海における出版界の概況
3. 書店の活動
(1) 19世紀後半の状況
(2) 20世紀初頭の状況
(3) 書店間の関係とその販売方法
4. 書業ギルド
5. 上海における書籍の輸出入
6. おわりに

1. はじめに

南京条約締結による開港後，急速に発展した上海は近現代史において政治・経済・文化・外交の一大拠点となり，現在も急速な発展を続ける大都市である。

この上海を文化の形成・伝播という視点から見た場合，印刷出版及び書店の存在を無視し得ない。情報伝播の有力手段である新聞社の活動については，例えば戈公振・方漢奇氏等の論著が挙げられる。一方，書店の活動については，長沢規矩也[①]・実藤恵秀[②]・朱聯保[③]・張静廬[④]等先学の業績が知られる。しかし長沢・実藤・朱氏等の研究は印刷出版[⑤]及び書店[⑥]の概観に止まり，張氏のそれは史料集であって，出版や書店に関して十分に解明されたとは言えない。

そこで本稿は，清末の文化形成と伝播に寄与した出版界の状況及び書店の活動について，上海を対象として考察してみたい。

2. 上海における出版界の概況

上海の出版及び書店が，清末の中国社会においてどのような役割を果たしていたのかについては，次の史料に当時の概況が述べられている。

上海ではすでに蒸気石印法により中国の著作数百種が印刷された。四ないし五社の企業があり，石印法で印刷された書籍の流通は全国に拡がりつつある。石印本を販売する小売店鋪数が大変多いことから，石印本に対する需要が増加していることが知られる。……『康熙字典』は1ドル60セントから3

ドルまでのさまざまな値段で販売される。使われる字体は大変小さく，気楽に読むには余りにも小さすぎる。そのような極小字体に対する需要がなぜ大きくなったのかを知るのは難しい。この必要不可欠な字書の，丁寧に木版に彫られた版は3ドルから15ドルの価格であり，字を細く細かく詰めて印刷されたこれらの作品に比べ，より有用である。これら石印版の買い手は，若い目を持った学生たちであり，早く読むことができる。彼らにとって，広い余白と大きい字体は利益とはならなかった。彼らは旅行するのに好都合な携帯用の箱に本を入れて所有する方を好んだ。すべての学生は旅をせねばならず，彼らは本を携帯することを好んだ。……この書籍の売買は，卸し売りにより遠方の省に〔本を〕供給した。そして石印書を売るために，倉庫が北京のペーターノスター通り（琉璃廠として知られる）に置かれた。また特に四川の大商業中心地である重慶にも置かれた。他の都市にも支店があった。それは広東のごときである。しかし印刷業の中心地は上海である。⑦

この記述から，上海で出版された本が全国の小売書店に流通し，北京その他の各都市にも支店が設けられ，例えば携帯本の『康熙字典』が多くの挙子に売れたことがうかがわれる。特に石印本の出版に関しては，点石斎・拝石山房・同文書局の三者が当時の上海で著名であったという。⑧

この石印出版が上海を中心として盛んになったのは，19世紀末の変法が実施された頃と思われる。すなわち雲間顚公の『嬾窩筆記』，紀京城書肆之沿革の条には，

光緒甲午以後に至り，朝廷変法に鋭意す。新学を譚る者，都(すべ)て喜びて欧西の訳本を流覧す。彼(か)の時，新会の梁啓超氏に西学書目表の輯有り，学ぶ者は咸(み)な表を按じ以って求む。⑨

とあって，光緒甲午（20年，1894年）以後に変法運動が盛んとなるに伴い，西学書が流行しはじめたのである。そしてその時期，梁啓超の『西学書目表』が必携の参考書となった。同書にはさらに，

京師の書賈もまた滬瀆に向い，新籍を梱載してより以来、海王村の各書肆，凡そ訳本の書の箱を盈さずして挿架する無く，善価を得て沽(う)らんと思う。⑩

とあり，京師（北京）の書店も滬瀆（上海）から西学書を盛んに買い求めていたことが知られる。そして上海の出版業が発展した理由は，印刷機を用いた大量出版にあった。すなわち，

上海の石版による中国書籍の印刷は，急速に一種の大規模企業となっている。この技術への蒸気機関の応用は，四・五台あるいはそれ以上の印刷機を同時に操作することを可能にした。そして一台のエンジンにより，大変多くの作品が印刷物の形で生産され得るので，中国の資本家たちはこの種の企業

に投資することが得策であるのを知っている。このように生産される書籍の安さは，読書が極めて一般的なたしなみとなっている国においては，大きな長所である。もう一つの利点は，見事な書法の美しさが版木よりも石版の方によく保たれることである。[11]

という記述から，上海の石印出版業が重要な産業となり，近代的な機器を用いて大量に書籍が印刷され，資本家たちもこの出版業に投資して巨利を博していたことが知られる。清末という時代において，印刷出版，特に石印書に関しては，上海は中国全土の一大中心となっていたのである。

3. 書店の活動

(1) 19世紀後半の状況

それでは，個々の書店に関して，具体的にどのような記録が残っているのであろうか。次の史料は長州藩士高杉晋作が，文久2年（同治元年，1862年）に上海を訪れた時の記録である。

五月十六日，……また馬路外の書坊に至り書籍を得て帰る。

十九日，雨，午後馬路外の書房に至り，店の主人と談じ，書籍を看て帰る。

二十八日，書坊来る，書籍を需む。

二十九日，書坊を訪う，書籍を得て帰る。

六月四日，書坊来る，皇清全図を需む。

これらの記事から高杉が上海の書坊と懇意[12]にしていたことがわかるが，彼以外にも何名かの者が上海滞在中の旅行記を残している。例えば尾張の高須藩士日比野輝寛もその一人であり，高杉よりも詳細な記事が次のごとく見られる。

五月十日，午下旅館ヲ出，右折シ市街ニ徘徊シテ骨董店ニ至ル。書画幅，玉，珊瑚珠，磁器ノ類アリ。棚上ヲ看レバ佩文韻府アリ。塵埃寸餘，ソノ価ヲ問フニ二十五元。我国ノ十三両ホド。コノ一ヲ以テ書籍ノ多クソノ廉ナルヲ知ルベシ。

十八日，……暫クシテ城内ニイリ書坊ヲタヅヌ。歩スル二里，美少年余ノ袂ヲ持シ相導ク半里，小街ニ至ル。書坊七八区相連ル。余坊ゴトニ所要ノ書ヲタヅヌルニ更ニナシ。蓋シ書坊ニ至レバ必ズ書目ヲイダス。ソノ書目子細ニケミスルヲエズ。書籍ノ多キ実ニタトヘガタシ。余四牌楼ノ一書坊ニテ茶ヲ吃シ書目ヲ見ル。ニワカニ腹痛シ廁ニ立タント欲ス。廁場ヲ問フ。少年余ヲ招キ楼ニ登ル。……暫クシテ少年ト書坊ニ帰ル。所要ノ書ナキモ少年ノ厚情ヲ感ジ，国語・国策・荘子ノ三部ヲ求メ，書坊ヲ出レバ雨降リ路甚ダアシシ。

五月廿日……未下旅館ヲ出，迂曲徘徊シ大馬路ヲスギ，書坊志雅堂ニ至ル。

六月九日……暫クシテ志雅堂書籍或ハ書画ヲ帯シ来ル。

十八日　晴　午下市街ヲ徘徊シ製鉄場ニ至ラントス。暑威ノタメニソノ志ヲトゲズ。志雅堂ニ至リ茶ヲ吃シ，書目ヲ一看シテ哺時旅館ニ帰ル。

廿四日　曇　志雅堂書籍ヲ帯シ来ル。某廿二史ヲモトム，万暦汲古本相半ス。ソノ価至ツテ廉ナリ。余我国ニ未ダ舶来セザル珍本ヲ要セント探索スルニ，カクベツノ物ハオホカラズ。

晦日……又左折右折シテ志雅堂ニ至ル。……志雅堂ニテ書籍ヲ点看シ，又前途ヲ歩シテ旅館ニ帰ル。

以上から，日比野が城内すなわち上海県城内の書坊を訪れたこと，格別珍らしい本はないが，その価格が低廉であったこと，彼が特に志雅堂書坊と親しかったこと等がわかる。

また浜松藩士名倉予何人も，書坊との関わりを以下のごとく書き記している。

五月十五日，晴……初馬路街ニ至リ書坊ニ至キリ。新出ノ兵書ヲ尋ルニ珍書アルコトナシ。……又城門ニ傍フテ南ニ赴キ，新北門ヨリ入リ，城内ヲ遊観スルコト久フシテ大東門ヲ出テ九思堂ト云ヘル書坊ニ過キリ，余陽借箸十二籌ヲ見ル。順治中所著ニ係ル。

十八日，雨降，辰牌，陪従シテ本館ヲ出テ，新北門ヨリ入テ城内ヲ徘徊ス。燈鋪・骨董鋪・書坊等ニ過リ，是ヨリ北門ヲ出テ，午前宏記館ニ帰ル。

六月初六日，好晴，……哺後小東門外諸街坊ヲ徘徊シ書坊ヲ過キリ，金陵癸甲摭歌ト云ヘル珍書ヲ見ル。是長毛賊猖獗ノ形勢広中年中ノ折末ヲ記セシム書ナリ。

これらから，名倉が訪れた書坊は城外の馬路街，大東門外，城内，小東門外という諸所に点在していたことが知られる。

また，明治5年（同治11年，1872年）に上海に滞在した長崎の医師，岡田穆の『滬呉日記』には，

二月十八日晴　朝，湯韻梅来る。遂に永寿と同じく相与に書肆掃葉山房を大東門彩衣街に訪ぬ。……また酔六堂書肆を過り，工人の製本するを観るに，甚だ盛んなり。

とあり，岡田が掃葉山房と酔六堂という書店を訪れていたことがわかる。

以上は幕末から明治初めにかけての日本人による記録であるが，もちろん中国人自身も上海についての興味ある記録を残している。急速に発展を遂げようとする当時の上海について，一種の旅行案内と呼ぶべき書物が刊行された。葛元煦の『滬游雑記』4巻（光緒2年，1876年の自序）がそれで，上海の地理・風俗・諸施設・交通・諸店鋪などについて詳述している。同書巻2，各貨聚市の条に，さまざまな商品を扱う店鋪がどこに分布しているのかを説明している。

書坊すなわち書店は，

書坊は城中の四牌楼・旧教場，城外の二三馬路に在り。

とあるごとく，県城内では四牌楼街や旧教場付近，城外の[16]租界地区においては二馬路や三馬路という一帯に分布していたことがわかる。同治末から光緒初年にかけては，城内と城外それぞれに書店の分布地域があったと言える。

当時，上海にはどのような書店があり，そこでどのような本が販売されていたのだろうか。

光緒5年（1879年）に上海を訪れた王錫麒は，閏三月初六日に千頃堂書坊へ行き『国朝正雅集』という詩文集を買い求めた。さらに翌日には美華書館へ出かけて書籍を印刷する現場を見学し，館主と印刷機器について語りあい，その価格が500元，大小の鉛字二揃いが約1500元ということを知った。

その4年後の光緒9年（1883年）に同地を訪れた姚覲元の『弓斎日記』[17]には，以下の記録が見られる。

（四月）乙丑，十五日，早に雨ふるも旋ち止む。鼐卿と偕に城に進み，書画を尋ね，看るも得ず，即ち帰る。抱芳閣より毛抄『六芸綱目』二冊を購得す，雌黄をって校し識し，字は甚だしくは精しからず，上に宋本及び甲の字印・并びに毛晋の名字及び汲古閣主人の印有り，其の直四元。また初印の『詞学叢書』（『日湖漁唱』一巻，『補遺』・『続補遺』各一巻を欠く），直三元。林写『精華録』一元。また毛抄『宋人小集』五十本有り，精妙絶倫にして，三百金を索む。百金を給予するも，尚お售らず。抱芳の鮑生，名は廷爵，字は奐甫。刻する所の『篆訣弁釈』及び翻『積古斎鐘鼎款識』を贈るも，皆な甚しくは精しからず。

すなわち，書肆抱芳閣[18]で毛抄『六芸綱目』を買い求めたほか，『詞学叢書』・『精華録』・『宋人小集』を手にとってながめ，店主の鮑廷爵から『篆訣弁釈』と『積古斎鐘鼎款識』の二書を贈られた。彼は翌日も鮑氏と会い書物について談じている。

丙寅，十六日，早に雨ふるも，旋ち止む。禺中に舟を放ち新閘に至る。鮑奐甫来る。『六芸綱目』・『精華録』の二書を以ってこれに付し，属ねて重装と為す。『図書集成叙目』一本を交来す（照抄する者に系く）。属ねて粤省の書楼に向いて銷售するものたり。云うところに据るに，万金を索むも実は六千金。うち約百余本を抄配するほか，原一紙より始め，書一万巻・目録四十巻を計え，共に五千二十本を装み，五百卅二函に分ち，六十箱に儲う。また景宋刊本『管子』と陶詩版二分，三百元を索め售を求む。蘇に到りて再び議ることを約す。

この日，姚氏は[19]『六芸綱目』・『精華録』の二書を重装してもらうため鮑氏に手渡し，『古今図書集成』の価格・巻数・箱数などについて語りあい，『管子』

などについて値段の交渉をしているのである。この15・16両日の記録から，古書という商品の性格もあるが，価格は客と販売者の相談の上決定されていたことがわかる。他の書店においても同様に，いまだ定価販売によらない例が多かったものと推測される。

姚氏は翌光緒10年（1884年）閏五月甲寅十一日にも，抱芳閣を尋ねている。

香翁，啓節して粤中に赴く。黼卿と偕に三茅閣橋の抱芳閣に至り，小しく憩う。

さらに[20]翌日には，

乙卯，十二日，晴。彦森と同文書局に游ぶことを約す。念劬来りて談ず。……已にして，伯施・彦森，孫君小甫とともに来る，即ち同に馬車に乗り虹口の同文書局に至る。徐ろにこれと観察導引し，全局を歴観するに，西法を用う。しかるに仍お墨を以って印す。これを点石斎に較ぶるに，勝ること多多なり。

とあり，[21]同文書局を訪れている。そして翌丙辰十三日には，

城を出て酔六堂・読未楼に至りて小しく憩う。『求是堂叢書』四十冊を購得す，其の値二十五元。日午，……抱芳閣に至る。楊惺吾と遇い，談じること半時許りにして別れる。

とあるように，酔六堂で[22]『求是堂叢書』を買い求めたのち，抱芳閣へ出かけ，楊惺吾（守敬）と語りあったのである。

これらから，売買された書籍の具体例，姚氏が立ち寄った書店の名とその所在地，書店における人的交流がうかがわれる。特に人的交流という点については，書店はただ書籍を販売するだけでなく，そこを訪れた知識人たちに情報交換の場をも提供していたと言えよう。また抱芳閣が古書を売買する伝統的な書店であったのに対し，同文書局は西洋の印刷法を用い，新刊書を売るという新しい形の書店及び印刷所であったと言える。当時の上海が，伝統的中華世界である県城と畸形的近代世界である租界という二つの異質な世界を有していたように，出版界においても新旧の書店・印刷技術が混然となって一つのまとまりを形成していたのである。

(2) 20世紀初頭の状況

時代が19世紀から20世紀へと推移する頃，上海の書店に一つの変化が表われるようになる。その変化とは書店の分布地域についてであり，前述のように19世紀後半においては，県城内と租界地区それぞれに書店の分布地域があった。ところが20世紀初め頃になると，前者の書店が減少する一方で後者のそれが激増し，分布地が租界区に集中するという変化がおこった。具体例としては，掃

葉山房・千頃堂・著易堂という県城内の書店が，租界地区に移転もしくは支店設置を行ない，活動の中心を移したことが挙げられる。また宣統元年（1909年）『上海指南』には，洋書専門店も含め，20店の書坊が[23]記録されているが，その所在地はすべて租界地区であり，県城内に立地する書坊は挙げられていない。さらに宣統3年(1911年)5月において，上海には少なくとも116店の書店が[24]存在したが，それらのうち県城を中心とする南部地区がわずか15店であったのに対し，租界を中心とする北部地区は98店の多きを数えていた(その他2店，所在地不明1店)。[25] これらの例から，19・20世紀の交において，書店の分布地域の中心が県城内から租界地区へと移動したことが明らかとなる。

書店の分布地域の移動がなぜ見られたのであろうか。これは上海の都市構造の変化と密接な関係を持っている。すなわち19世紀初め頃，上海の商業の中心地は県城内にあった。特に県城内の東南部は黄浦江に近く，船の乗組員が盛んに往来し，貨物の積卸しの盛んな東門・南門内外には店鋪が数多くあり，賑やかな街路を形成していた。ところが19世紀中頃の開港以後，列強による土地経営が本格化し，租界が隆盛を極めはじめたのに対し，[26]県城周辺の南市は日ごとに衰退していった。このように商業の中心地が移動したのは，租界には豊富な手付かずの土地があり交易にも便利であったのに対し，黄浦江沿いの南市は土地が手狭となり，県城と黄浦江との交通が不便になったためであった。これに加えて県城内の土地の狭さと環境悪化も，その経済活動の衰退に拍車[27]をかけた。すなわち『上海指南』巻2，城内大概の条に，

> 惟だ城内の市街は狭隘にして，行人擁擠す。掃除は力めず，穢気途を塞ぎ，外人の譏(そし)るところと為るを免れず。

とあるように，県城は人が住み経済活動を行なうには規模が小さすぎ，衛生状態も劣悪であったことなどである。[28]

これに対し租界区は県城以北の地域に漸次拡大され，名実ともに上海の中心地となっていった。『上海指南』巻2，英租界大概の条に，

> 馬路は方罫のごとく，縦横に排列せられ，四通八達す。而して尤(もっと)も南京路を以って中心の中心と為す。南京路，東のかた浦灘より起こり，西のかた泥城橋に至る。市街広闊にして房屋高敞，滬上の冠たり。[29]

とあるように東西南北に街路が通り，中でも南京路（大馬路）が一番の賑わいを見せていた。続いて同書同条には，

> 此の外の市街は，福州路・広東路・山東路・山西路・河南路・福建路・湖北路等のごとく，皆な繁盛の区たり。店鋪林立し貨物山積し，往来の行人は轂撃肩摩す。洵(まこと)に菁華薈萃の所なり。[30]

とあって，南京路以外の街路も同様の殷賑を示していたことがうかがわれる。[31]

このような商業中心地の移動に伴って，書店の分布地域も県城から租界へとその重心を移すのである。そして租界区の中でもその分布が特に集中していたのは福州路（四馬路）と河南中路（棋盤街）とであった。遠山景直の『上海』[⑱]，御土産の条に，

各商賈の聚る処……書籍，四馬路棋盤街。

とあるごとく，今世紀初頭の分布地域が示されている。また当時の棋盤街の様子を描写したものとして，晩清小説の代表作，李宝嘉（伯元）の『文明小史』第16回の内容を挙げることができる。以下に引用するのは，当16回の主人公である姚老夫子（姚生先）が数人を伴い上海の街を散歩する場面である。

姚先生について南に向かい，棋盤街に至った。両わきの西洋雑貨店や薬局を見るに，いずれも極めて新しい店鋪で，ガラスのドアが大変立派である。再び南に歩いていくと，その一帯は書店街で，江左書林・鴻宝斎・文萃楼・点石斎などの看板があり，ちょっとやそっとでは覚えきれない。姚先生は例年の大考や小考によって，科挙試の時に出る小屋がけの本屋を大半知っていた。文萃楼の主人とはとりわけの知りあいであったので，文萃楼へ行って本を読んだ。[⑲]

この記述から，棋盤街に書店が多く集中し，賑わっていた当時の様子を知ることができる。

また同書には各回に2枚ずつ挿絵があり，これらからも当時の書店の雰囲気をうかがうことができる。第17回には，第16回で姚先生が訪れた文萃楼が描かれており（付図1・2），数人の客と店員とが本をめぐって話をしており，店員の背後には壁二面を使って本を配架している様子がわかる。また第34回にも書店が描かれており（付図3），看板の「新社編訳中外書籍」・「本社発兌中外書籍」の文字，画面右の店員と客との交渉，画面中央の作業中の様子等がよみとれる。さらに第35回の挿絵（付図4）には画面左に書店が見られ，勘定台をはさんでの店員と客の様子がうかがえるほか，「中西各種書籍」・「各国輿地全図」等の看板から，海外情報が求められた当時の状況を知ることができる。

(3) 書店間の関係とその販売方法

これらの書店は各々が孤立して営業活動をしていたわけでなく，ある程度の提携関係を結び，その販売方法も近代的な形態がとられていた。その例は広百宋斎・申報館・江左書林の三者に見られる。

まず広百宋斎については，設立者徐潤の『徐愚斎自叙年譜』，光緒11年乙酉（1885年）48歳の条に，

広百宋斎の経理王哲夫先生，並びに朱岳生・許幼荘，鋼版・鉛版を以って硃批雍正上諭・九朝聖訓・四書味根録・四書文富・絵図三国演義・聊斎・水滸

・石頭記及び縮本康熙字典を選輯し，上海に分售す。並びに抱芳閣に託して寄銷す。開銷を除くの外，所有の盈餘は資本を清還す，其の餘の書籍は各書荘と相通じ対調す。[34]

とあり，広百宋斎が抱芳閣に委託販売を依頼していたこと，保有している書籍を各書店が交換していたことがわかる。

次の申報館とは，同治11年（1872年）にイギリス人メージャー（F. Majer）の手によって創設された新聞社であるが，本業以外に書籍も出版し，その書目が『申報館書目』（光緒3年＝1877年刊）である。この書目の巻末に，発売地点が各省ごとに以下のように列挙されている。[35]

北京。天津。南京。蘇州，宋仙洲巷沈公記。杭州，薦橋。揚州。南昌，学院前季玉堂図書鋪。武昌。福州，復利洋行。漢口，信和洋行。漢陽。温州，浙寧会館。寧波，江北岸順泰洋行。香港，中環百歩街循環日報館。上海，本館賑房・邑廟青囊室・千頃堂書坊・味三堂書坊・松筠閣書坊・醉六堂書坊。

これによれば，申報館出版の書籍が全国で売り捌かれており，特に上海においては申報館を含めて計6カ所の発売所が確認できる。そして申報館出版の書籍をどのようにすれば入手できるのかについても，次のように説明している。

諸君，是の地に居る者は，皆な就近の申報を売る人の処へ向かい購閲す可し。若し貴地に並びに分館無くんば，則ち請うらくは札を作し信局或いは信船に由り，該価を帯し交し，上海老北門外四馬路口の本館賑房に至らんことを。[36]

つまり，上海においては『申報』発売所へ行って注文すればよく，申報館の支店がない所では，郵便を利用して必要な書名及びその代金を同封し，上海の申報館あてに送れば買い求めることができた。これは通信販売の方法が行なわれていたことを示す草創期の史料であると言える。

江左書林においても同様のことが行なわれていた。『江左書林書目』（光緒12年＝1886年刊）の巻首には，

本坊，経史子集を捜輯するを創始すると云うといえども，有用の各書を讐校す。必ず料重く，工精しきを以って，海内に印行す。並びに同文局・点石斎の縮印石照および銅板・鉛字等の書由り博く採り，旁らに精華を捜し略ぼ備われり。[37]

と，初めに同文書局や点石斎との関係を述べる。次に，

且つ上は京畿・瀋・遼より，下は閩・広・楚・豫におよび，通達に間無し。苟くも宇内所有の書たるは，咸な力致し以って宦紳貴客の需要に応う。古今の書籍旧本，また捜羅し，甚だ富み，価廉く，物美しく，蒙を定む，博雅君子の賞鑑する所なり。[38]

とあることから，その活動範囲が北は北京や東北地方から，南は福建・広東・広西・湖北・湖南などの全国にわたっていたこと，また古書籍を全国から集めており，その質量が豊富でしかも廉価だったことがわかる。そして次に，

爰(ここ)に書目一冊を備え，以って憑りて選択す。近きは則ち親ら自ら検購し，遠きは則ち郵筒もて転逓す。価は一律に帰し，以って誌して欺かず。惟だ近時の新刻，日に増し月に盛んにして，名目甚だ繁く，全載するに及ばず。幷びにこれを諒さんことを請う。[39]

とあるのが注目される。すなわち書目を作成し，定価をつけた商品を通信販売により売り捌くという方法が確立していたわけで，当然商品を大量生産していることが前提とされるのである。

4. 書業ギルド

書業ギルドの活動内容については，従来具体的な史料がなく，不明な点が少なくなかった。ところが近年，原放氏らによって書業ギルドの檔案が紹介され，その活動内容が具体的に明らかとなった。この檔案等によれば，清末の上海には二つの書業ギルドが存在した。一つは[40]上海書業公所であり，他の一つは上海書業商会であった。前者は康熙元年（1662年）頃に設立された蘇州崇徳公所の流れをくみ，光緒12年（1886年）に上海に創建された。また後者は光緒31年（1905年）の成立にかかり，前者とは別に活動していた。これら両者のうち，活動内容がより詳細にわかるのは前者である。以下に[41]おいては，原放氏紹介の「上海書業公所初次訂定章程」（光緒32年，1906年）に依拠しながら，上海書業公所の実態について述べたい。[42]

上海書業公所（以下公所と略称する）設立の目的については，同書の第二条に，

同業を聯合し，規則を釐定し，翻印を杜絶し，違禁の私版を稽察し，同業の轇轕を評解するを以って，宗旨となす。[43]

とあって，業務の大要を知ることができる。

続いて公所の所在地等については，第三条に，

昔年，本埠の同業，資を集め息を生み，新北門内に基地三分七厘四毫・屋十二間を購置し，当てて書業崇徳堂の公産と為し，永く出售せず。現に月収を按じ租金を取り，即ち本公所の経費に充つ。[44]

と旧年の公所所在地が県城内にあったことを明示する。そして，第四条に，

交通の便に因り，暫く公共租界浙江路小花園街口十二号の洋房を賃(か)りて公所と為し，幷びに徳律風一千一百四十一号を設く。[45]

とあるように，新公所の所在地は租界へ移転し，あわせて当時の先端技術である電話が設置された。公所所在地の移転については，前述の書店の分布地の中

心が租界へ移ったこととの関連が指摘できよう。

この書業公所に所属するのは，いわゆる書店だけではなかった。すなわち第六条に，

甲，凡そ上海一埠内の図書業に関わるところの商家は，木板・石印・銅版・鉛版，荘局・坊店および各報館・儀器館の書籍を兼售する者を論ずる無く，皆な当に同業と認め為すべし。

と書籍を販売する業者すべてが公所の職員となるべきことを記している。[46]

次に公所の経済関係について述べたい。第五条には，

前の崇徳堂の置産・支余の款，洋一千五百六十六元四角・銭二百四十文を計う。また本埠の同業，戊戌（1898年）・己亥（1899年）の間において続けて経費支余の款を籌り□を計う。現在創立の公所の動支するこの款を除くの外，なお洋□を存つ。本公所の会計董事の経管に統帰し，存放し妥荘生息す。

と崇徳公所以来の旧資産額が明示されている。[47] もちろんこの資産だけでは公所を運営していくことができないので，公所所属の書店主たちは月ごとに組合費を支払った。すなわち第十条に，

本公所の経費は公議もて毎月二元・四元・六元・八元を按じて四等と為し，各坊・局は力を量りて認を願う。月捐は毎月十六日もて収取し，掃数は会計董事に滙交して収存す。

とあるのがそれである。[48] そして第十二条に，

本公所の賬房は毎月底に至りて四注清冊を滙造し，総董事会計董事処に呈送して存根は備核す。另に一分を繕いて所中に粘貼し，以って徴信を昭らかにす。

とあるように，[49] 月末には公所の収支額が公開され，伝票等を証拠として決算報告がなされた。

それではこの書業公所は何を業務内容とし，どのように機能していたのであろうか。第六条には，

丙，同業所有の木板・石印・銅版・鉛版および新旧の書底，皆な須らく花名・頁数を将って詳細に公所に報明し，登冊して待査すべし。并びに版権を申請し過ること有るや無きやを声明す。

己，凡そ鉛・石・銅版の各書底，此の後或いは首尾の頁において，或いは中縫間において，一律に加うるに版主の牌号をもってし，以って混淆を免る。

などとあるように，版権の保証が公所の主要業務であった。[50] そして同条に，

戊，本公所附設の陳列所，凡そ同業の已経に出版せしところの書，各一部を検送し来り陳列するところなり。

とあるように，[51] 出版された本を陳列するための陳列所が附設されていた。さら

に禁書の自主規制も業務内容の一つとして挙げることができる。同条に，

庚，凡そ違禁等の書，倘し公所の査を経て私行印售する者有らば，書と書底とを将って焼毀するを除くの外，再び公に重罰を議る。[52]

とあるのがそれである。これは第七条の，

本公所の業経に本埠の商務総会に呈請せし備案は，幷びに請いて地方官に移咨し，一体に立案給示し，以って久遠に維つ。[53]

という条文とともに，公所を永続させるために，公所が政府の支配機構の下部組織として機能していたことを物語っている。また第六条に，

辛，同業中に如し轇轕の交渉有らば，公所に告知すべし。両造を邀集し代りて和平の理勧を為す。倘し勧めて従わざれば，本公所もまた勉強するを得ず。同業者の理めざるに関わらず。

とあるごとく，同業者間の紛争を調停するのも公所の仕事の一つであった。そして第十六条に，[54]

現に同業中の人，経費を籌備し教員を延聘し夜班補習会を創立するを擬りて，公所に附して同業の学徒に教授す。現に已に議決し，暑假の後を俟ちて照弁す（会章另訂）。

とあるように，単に実務業務だけに止まらず，福利施設の設置をも書業公所は行なっていた。それは将来的には，第十七条に，[55]

本公所，籌款の充裕を俟ち，度支に余有らば，まさに書業学堂を創立し，以って後起を培うべし。

とあるように，公所が学校設立をめざしていたことが知られる。[56]

次に書業公所の役員がどのようなメンバーで構成され，どのような職責を持っていたかについて述べたい。第八条に，

本公所弁事の人員，坐弁一員を除くの外，司事二人に薪水を照支し，服役二名に工資を酌給す。余は皆な公に憑りて選挙し，各おの義務を尽くし，薪俸を支せず。

とあり，公所の役員はいずれも選挙によって選出され，原則として無報酬だった。[57] そして役員として正董事1名，副董事4名，議董8名，会計董事1名，幹事6名，調査8名，査賬董事2名，糾察1名，列表1名などが挙げられる。これらの職責について例を示せば，第八条に，

甲，正董事一員を公挙す，全所の事務を綜理し，外界に対し公所の代表と為る。副董事四員これを輔く（坊，局各二人）。正董事に事有りて到らざる時は，即ち副董事の代理に由る。

乙，議董八員を推挙す（坊，局各四人），毎日午後，所に到り，弁るべき各事を会議す。凡そ同業の交渉事件，或いは徇私偏袒の情事有るを評議す。……

丙，会計董事一員を推挙す，所の中統年度の支預籌銀銭の出入を管理し，産業の契据を収執する等の務めあり。[58]

とあり，この条項から，公所の代表が正董事，その補差役及び代理が副董事，公所会議の評議員が議董，公所の出納役が会計董事であったと言える。幹事以下についても同条にその職責が明記されているが，これら役員の任期は，第十九条に，

本公所の正副董事・議董・会計董事及び調査幹事・査賬・糾察・列表等の員は皆な一年に一任たりて，任満つれば另に挙す。惟だ続いて挙を被る者，仍お連任すべし。或いは事に因りて克く任を終えざる者，公に同に続挙さる。[59]

とあるように，原則として1年であったが，しばしば2年以上にわたって同じ職責をつとめた。

会議の運営については，第十三条に，

凡そ議を開く時は，正董事を以って主席と為すべく，副董・議董の場に到る者は須らく過半の数有るべし。しからざれば則わち議を開くを得ず。[60]

とあって，正董事・副董事・議董の出席が重要視された。

前述のように，上海の印刷出版が重要な意味を持つようになるのは19・20世紀の交であったが，書業公所も時を同じくしてその基礎が築かれ，民国以後の発展を迎えるのである。

5. 上海における書籍の輸出入

清末という時代は，文化的にも一つの大きな転換期であった。すなわち，アヘン戦争・清仏戦争・日清戦争と続く対外戦争での敗北の時期を境として，それまでの中国文化に対する威信が崩れさり，中国は文化輸入国へと立場を変えるようになった。日本との関係で例を示せば，1660—1867年中の中国語に訳された日本の書籍，いわゆる中訳日文書の数がわずか4種であるのに対し，1868—1895年のそれは8種，1896—1911年には958種と激増し，1912—1937年には1,759種の多きを数えるようになる。毎年の平均書数で見れば，1660—1867年中の微量な時期を度外視するにしても，以下0.29種，63.86種，70.36種と激増している。その転換の時期は，19世紀末から20世紀初めにかけての清末であると言ってよい。[61]

明治37年(光緒30年，1904年)に刊行された『日清通商便覧』には，1899年から1903年までの日本から清国への輸出重要品が幾つか記されている。それらのうち書籍の輸出額を見てみると，1899年が33,533円，1900年には25,876円と少し減るが，1901年には33,291円とやや回復し，1902年には3倍強の108,411円と急増，1903年にはさらに192,751円と急速な伸びを見せるようになった。[62] そし

て大正元年（民国元年，1912年）刊の『1911年，支那貿易の概況』によれば，1910年に清国が日本から輸入した書籍及び楽譜の額は465,864両，さらに1911年には533,941両を数えるようになった。

またほぼ同時期，清国が海外諸国から[63]輸入した書籍及び海図の価額が『第一回支那年鑑』に記されている。同書によれば1908年が515,422両，1909年が434,594両，1910年が478,127両であり，輸入額の大要を知ることができる。

これら日本書を中心とする外国書籍輸入の窓口となったのが上海である。[64][65]明治25年（光緒18年，1892年）刊の『清国通商綜覧』には，1889年の上海における書籍の輸出入状況が記録されている。同書によれば，当時，海外から25,190両の書籍が上海を経由して流入し，さらに上海を発信地として336,573両の書籍が香港やその他の地に流出していた。これに対し，上海から海外に輸出されたのはわずか3,991両だけであった。

さらに20世紀初頭に入ると，[66]より多量の書籍が上海を介して流通するようになる。明治40年（光緒33年，1907年）刊の『清国事情』によれば，1904年において上海から海外及び国内諸港に輸出される書籍は1,143,032両を数えており，著しい増加を見せている。

このように，上海は海外[67]文化受容の窓口になるとともに，新しい文化を中国各地に伝播する中心地であった。その例として翻訳書・石印書の流行を挙げることができる。翻訳書流行の中心が上海であったことについては，『文明小史』第17回にその様子をうかがうことができる。すなわち主人公の姚文通が上海の文萃書坊で店主と語りあう場面が次のように描かれている。

> 姚文通は胡中立の馬車が道を過ぎ去っていくのを見ているうち，やっと店内に入った。そして店の主人と話をし，最近またどんな新刊を出したのか尋ねた。店の主人は言った，「近頃は翻訳された本が広く流行しています。当店では特に多くの著名な先生をお招きし，別に翻訳所を設けており，そこが当店に替わって専門に翻訳しています。訳出された本は，すべて当店から上海道新衙門に至り登録されています。この本の版権は続いて我々に帰し，別の書店が翻刻することは許されません。」[68]

この記述から翻訳書の流行だけでなく，書店による翻訳所の設置，上海道台による翻訳書の登録などの事項をもうかがえ興味深い。

上海における石印書の流行については前述したが，清末の世相を描いた呉沃堯（研人）の『二十年目睹之怪現状』，第72回には当時の状況が描写されている。ここでは主人公の九死一生なる者が北京琉璃廠の老二酉書店で番頭と語りあう場面であり，次のごとくである。

私はまた，他の本棚に大変多くの石印書が収められているのを見て尋ねた。

「いま石印書は北京でも広く流行しているのですか。」その人は言った，「流行することはしているのですが，値段が高くて売れないのです。以前はまだよかったのですが，ここ二年ほどは王某なる者がおり，かまわずに上海から仕入れては，大衆の相場にもかかわらず仕入れ値は安く，そのため大変安い値段で売っています。おかげで我々はみな，原価を見込むこともできません。」私は言った，「その王某というのは，ときに字を伯述と言いませんか。」その人は言った，「まさにそのとおりです。あなたは彼を知っているのですか。」私は言った，「いささかよく知っております。いま彼が北京にいるかどうか知りませんか。どこに住んでいるんでしょうか。」その人は言った，「それが，どうもあまりはっきりとはしていません。」私はそのため尋ねなかった。[8]

この記述からは，上海の石印書が北京でも流行していること，しかもそれが非常に廉価であったことが知られる。上述の小説の中にも描かれているように，海外文化の受容とその伝播という点に関しても，当時の上海は重要な位置を占めていたと言うことができる。

6. おわりに

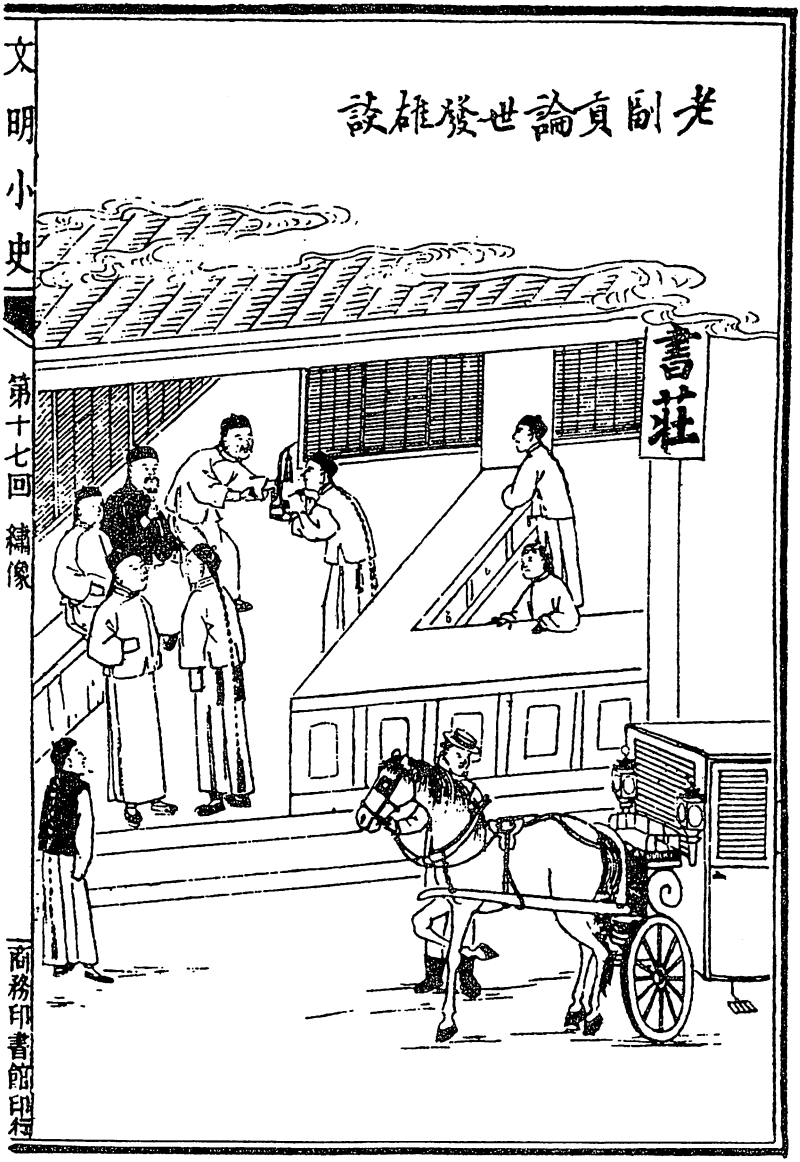
上述のように，清末の上海における出版及び書店の活動について考察した。19世紀半ば以降，上海における書店の分布地域は大きく分けて県城内と租界地区との二箇所であった。ところが19世紀末に商業の中心地が租界地区に移動するのに伴い，書店もそのほとんどが租界区域に集中し，特に四馬路や棋盤街では多くの書店が営業活動を行ない殷賑を極めた。

これらの書店は相互に提携関係を結んで委託販売を行なう一方，通信販売制を確立し書籍の流通範囲を全国規模に拡大した。このため当然のことながら書籍は大量に出版され，定価・廉価販売の方法を確立させたのである。

さらに上海の書店は，相互の利益増大を計るため「書業公所」という同業ギルドを結成した。このギルドは版権保証，出版書籍の陳列，禁書の自主規制，同業者間の紛争調停，福利施設の設置などを行ない，その役員は選挙により選出された。

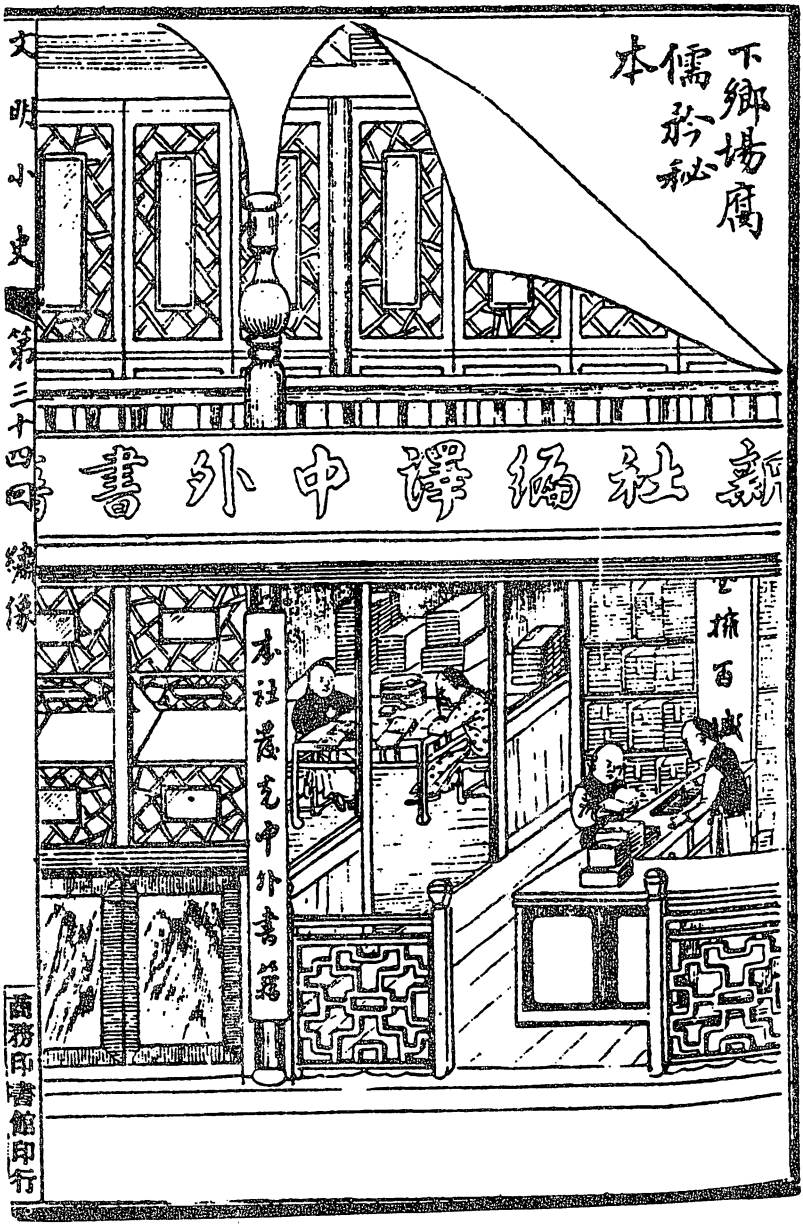
19世紀末から外国書籍の輸入が激増するが，その窓口となったのが上海であった。それに伴い，上海を中心として翻訳書や石印書が出版され，新しい文化が全国に拡がる基礎をつくったのである。

以上のことから，清末の中国における上海の文化的地位の重要性を知ることができるであろう。



付図 1.　上海の書店（『文明小史』第17回）

付図 2.　上海の書店（『文明小史』第17回）



付図 3. 済南の書店（『文明小史』第34回）

付図 4. 済南の書店（『文明小史』第35回）

註

①戈公振『中国報学史』(商務印書館，1927年)。

②方漢寄『中国近代報刊史』2冊（山西人民出版社，1981年)。

③長沢規矩也「近代支那の図書及図書館」(『アジア問題講座』第10巻，創元社，1929年)。

④実藤恵秀「支那新書店盛衰記」(『図書館雑誌』第34年第12号，1940年)。

⑤朱聯保「解放前上海書店・出版社印象記」㈠～㈩（『出版史料』第1～第10期，学林出版社，1982～87年)。

⑥張静廬輯註『中国近代出版史料』2冊（上雑出版社，群聯出版社，1953～54年)。同『中国現代出版史料』5冊（中華書局，1954～59年)。同『中国出版史料（補編)』(中華書局，1957年)。

⑦North China Herald, May 25, 1889. *PHOTO LITHOGRAPHIC PRINTING IN SHANGHAI.*

Many hundreds of Chinese works have already been printed by steam in Shanghai by the lithographic process. There are four or five establishments and the circulation of the books thus produced is being pushed throughout the country. The number of retail shops where they are sold is so great as to show that the demand for books printed in this way is increasing... A Kanghsi's dictionary is sold at various prices, from a dollar and sixty cents to three dollars. The character adopted is very small, too small for comfort. Why the demand for characters of such a very small size should have grown up it is difficult to see. Handsomely engraved editions on blocks of this indispensable dictionary at prices varying from three dollars to fifteen are much more useful than these works of such very fine and close printing. The buyers of these lithographed editions are students who have young eyes and read fast. To them broad margins and large type are no advantage and they prefer to have books in portable boxes suited for travelling. All students have to travel and they like to take books with them... This trade being wholesale supplies distant provinces, and depôts are established for the sale of lithographed books at the Paternoster Row of Peking known as Liu-li-chang, and especially at Chung-king the great commercial emporium of Szechuan. There are also branch establishments in other cities, such as Canton ; but the seat of the manufacture is Shanghai.

なお，同条には中文による抄訳（前註⑥『中国出版史料（補編)』所収）がある。

⑧黄協塤『淞南夢影録』(『筆記小説大観』正編第6冊）巻2，「石印書籍，…英人所設点石斎，独擅其利者，已四五年。近則寧人之拝石山房，粤人之同文書局，与之鼎足而三。甚矣利之所在，人争趨之也。」

⑨孫殿起輯『琉璃廠小志』(北京古籍出版社，1982年）第1章概述所引，「至光緒甲午以後，朝廷鋭意変法，譚新学者，都喜流覧欧西訳本，彼時，新会梁啓超氏有西学書目表之輯，学者咸按表以求。」

⑩同書同条，「而京師書賈亦向滬瀆，捆載新籍以来，海王村各書肆，凡訳本之書無不盈箱挿架，思得善価而沽。」

⑪前註⑦ PHOTO LITHOGRAPHIC PRINTING IN SHANGHAI

The Printing of Chinese books in Shanghai by lithography is rapidly becoming an extensive branch of trade. The application of the steam engine to this art has rendered it possible to keep four, five or more presses in operation at the same time, and so large an amount of work in the form of printed sheets may be turned out by a single engine, that Chinese capitalists find it profitable to invest money in this enterprise. The cheapness of the books thus produced is a great recommendation in a country where reading is a very common accomplishment. Another advantage is that the beauty of good writing is better preserved on stone than on carved wood.

⑫高杉晋作『遊清五録』（奈良本辰也監修，堀哲三郎編『高杉晋作全集』下巻，新人物往来社，1974年）。

⑬日比野輝寛『贅肬録』（東方学術協会『文久二年上海日記』，全国書房，1946年）。

⑭名倉予何人『海外日録』（田崎哲郎「名倉予何人『海外日録』」，愛知大学国際問題研究所紀要83，1986年）。

⑮岡田穆『滬呉日記』（長崎，1890年），「二月十八日晴　朝，湯韻梅来。遂同永寿相与訪書肆掃葉山房於大東門彩衣街。……又過醉六堂書肆，観工人製本，甚盛。」。

⑯葛元煦『滬游雑記』巻2，各貨聚市，「書坊，在城中四牌楼・旧教場，城外二三馬路。」。

⑰王錫麒『北行日記』（『清代日記滙抄』，上海人民出版社，1982年），「閏三月初六日，己卯，晴。至千頃堂書坊，購国朝正雅集等書，正雅集乾嘉以後詩人詩，皆載焉，蒐羅宏富，為儀徴苻南樵先生所輯，披読数巻。」。

「初七日，庚辰，晴。至美華書館観印書籍，芝翁引観各処，晤館主美国和君，甚謙靄，談及印字機器一架祗五百元，大小鉛字二副，約一千五百元上下。」。

⑱姚覲元『弓斎日記』（『清代日記滙抄』，上海人民出版社，1982年），「（四月）乙丑，十五日，早雨，旋止。偕黼卿進城，尋書画，看不得，即帰。従抱芳閣購得毛抄『六芸綱目』二冊，以雌黄校識，字不甚精，上有宋本及甲字印幷毛晋名字，及汲古閣主人印，其直四元。又初印『詞学叢書』（欠『日湖漁唱』一巻，『補遺』・『続補遺』各一巻），直三元。林写『精華録』一元。又有毛抄『宋人小集』五十本，精妙絶倫，索三百金。給予百金，，尚不售。抱芳，鮑生名廷爵，字奐甫。贈所刻『篆訣弁釈』及翻『積古斎鐘鼎款識』，皆不甚精。」。

⑲同書，「丙寅，十六日，早雨，旋止。禺中放舟至新閘，鮑奐甫来。以『六芸綱目』・『精華録』二書付之，属為重装。交来『図書集成叙目』一本系照抄者，属為向粤省書楼銷售，据云，索万金，実六千金。内抄配約百余本外，原始一紙，計書一万巻，目録四十巻，共装五千二十本，分五百卅二函，儲六十箱。又景宋刊本『管子』暨陶詩版二分，索三百元求售。約到蘇再議。」。

⑳同書，「（閏五月）甲寅，十一日，晴。香翁啓節赴粤中，偕黼卿至三茅閣橋抱芳閣小

憩。」。

㉑同書，「乙卯，十二日，晴。彦森約游同文書局，念劬来談。……已而，伯施・彦森，偕孫君少甫来，即同乗馬車至虹口同文書局，徐与之観察導引，歴観全局用西法。而仍以墨印，較之点石斎勝多多矣。」。

㉒同書，「出城醉六堂・読未楼小憩。購得『求是堂叢書』四十冊，其値二十五元。日午……至抱芳閣，与楊惺吾遇，談半時許而別。」。

㉓前註⑤㈣・㈥。

㉔（宣統元年）『上海指南』（商務印書館，1909年）巻5。

㉕原放「上海市書業公会」（『出版史料』，第10期，1987年）附「清末民初上海的出版業」

㉖鄭祖安「上海旧県城」（『上海史研究』，学林出版社，1984年）。

㉗同書。

㉘前註㉔巻2，「惟城内市街狭隘，行人擁擠。掃除不力，穢気塞途，不免為外人所譏。」

㉙鄭祖安「近代上海都市的形成――一八四三年至一九一四年上海城市発展述略」（『上海史研究』，学林出版社，1984年）。

㉚前註㉔巻2，「馬路如方罫，縦横排列，四通八達。而尤以南京路為中心之中心。南京路東起浦灘，西至泥城橋，市街広闊，房屋高敞，為滬上冠。」。

㉛同書，「此外市街，如福州路・広東路・山東路・山西路・河南路・福建路・湖北路等皆為繁盛之区，店鋪林立，貨物山積，往来行人轂擊肩摩，洵菁華薈萃之所也。」。

㉜遠山景直『上海』（東京，1907年）。

㉝李宝嘉『文明小史』（1906年），第16回「妖姫織豎婚姻自由　草帽皮靴装束殊異」の条，

跟着姚老夫子朝南，到了棋盤街，一看両旁洋貨店・丸薬店，都是簇新的鋪面，玻璃窓門，甚是好看。再朝南走去，一帯便是書坊，什麽江左書林・鴻宝斎・文萃楼・点石斎各家招牌，一時記不清楚。姚老夫子因歴年大考・小考，趕考棚的書坊，大半認識，因同文萃楼的老板格外相熟，因此就踱到他店裏去看書。

㉞徐潤『徐愚斎自叙年譜』（『新編中国名人年譜集成』第12輯），光緒11年乙酉48歳の条，「広百宋斎経理王哲夫先生，並朱岳生・許幼荘，以鋼版・鉛版選輯硃批雍正上諭・九朝聖訓・四書味根録・四書文富・絵図三国演義・聊斎・水滸・石頭記及縮本康熙字典，分售於上海。並託抱芳閣寄銷。除開銷外，所有盈餘清還資本，其餘書籍，与各書荘相通対調。」。

㉟尊聞閣主『申報館書目』・縷馨僊史『続集』（上海申報館，1877年，続集1879年）。

㊱同書，「諸君，居是地者，皆可就近向売申報人処，購閲。若貴地並無分館，則請作札，由信局或信船，帯該価交，至上海老北門外四馬路口本館賑房。」。

㊲『江左書林書目』（江左書林，1886年），「本坊，雖云創始搜輯経史子集，讐校有用各書，必以料重工精印行海内，並由同文局・点石斎縮印石照以及銅板・鉛字等書博採，旁搜精華略備。」。

㊳同書，「且上自京畿・瀋・遼，下逮閩・広・楚・豫，通達無間。苟為宇内所有之書，咸力致以応宦紳貴客需用。古今書籍旧本，亦搜羅，甚富，価廉，物美，定蒙，博雅君子所賞鑑焉。」。

㊴同書，「爰備書目一冊，以憑選択。近則親自検購，遠則郵筒転遞。価帰一律，以誌不欺。惟近時新刻，日増月盛，名目甚繁，不及全載。并請諒之。」。

㊵前註㉕原放「記上海市書業公会」。

㊶『上海県続志』巻3，会館公所の条，「書業商会，在英租界望平街。光緒三十一年八月成立。三十二年，通禀商部学部督撫道県立案，以本業納捐者為会員。由会員選挙議員，以経理之。是年五月，設図書陳列所，並発行図書月報。十一月，設学徒補習所。宣統三年，復禀民政部立案。」。

㊷前註㉕附「上海書業公所初次訂定章程」。

㊸同書，「第二条　以聯合同業，釐定規則，杜絶翻印，稽察違禁之私版，評解同業之轇轕為宗旨。」。

㊹同書，「第三条　昔年，本埠同業集資生息，購置新北門内基地三分七厘四毫・屋十二間，当為書業崇德堂公産，永不出售，現按月収取租金，即充本公所経費。」。

㊺同書，「第四条　因交通之便，暫賃公共租界浙江路小花園街口十二号洋房為公所，并設德律風一千一百四十一号。」。

㊻同書，「第六条…甲，凡上海一埠内関于図書業之商家，無論木板・石印・銅版・鉛版，荘局・坊店以及各報館・儀器館之兼售書籍者，皆当認為同業。」。

㊼同書，「第五条　前崇德堂置産支余之款，計洋一千五百六十六元四角・錢二百四十文，又本埠同業于戊戌・己亥間統籌経費支余之款，計□，除現在創立公所動支此款外，仍存洋□，統帰本公所会計董事経管，存放妥荘生息。」。

㊽同書，「第十条　本公所経費公議每月按二元・四元・六元・八元為四等，各坊・局量力願認。月捐每月十六日収取，掃数滙交会計董事収存。」。

㊾同書，「第十二条　本公所賬房至每月底滙造四柱清冊，呈送総董事会計董事処存根備核，另繕一分粘貼所中以昭徴信。」。

㊿同書，「丙，同業所有木板・石印・銅版・鉛版及新旧書底，皆須将花名・頁数詳細報明公所，登冊待査，并声明有無（申）請過版権。」。

「己，凡鉛・石・銅版各書底，此後或于首尾頁或于中縫間，一律加以版主牌号，以免混肴〔淆〕。」。

51同書，「戊，本公所附設陳列所，凡同業已経出版之書，各検送一部来所陳列。」。

52同書，「庚，凡違禁等書，倘経公所査有私行印售者，除将書与書底焼毀外，再公議重罰。」。

53同書，「第七条　本公所業経呈請本埠商務総会備案，并請移咨地方官一体立案給示，以維久遠。」。

54同書，「辛，同業中如有轇轕之交渉，可告知公所，邀集両造代為和平理勧。倘勧而不従，本公所亦不得勉強。不関同業者不理。」。

55同書，「第十六条　現同業中人擬籌備経費延聘教員創立夜班補習会，附于公所教授同業学徒，現已議決，俟暑假後照弁（会章另訂）。」。

56同書，「第十七条　本公所俟籌款充裕，度支有余，当創立書業学堂以培後起。」。

57同書，「第八条　本公所弁事人員，除坐弁一員外，司事二人照支薪水，服役二名酌給工資，余皆憑公選挙各尽義務，不支薪俸。」。

㊽同書，「甲，公挙正董事一員，綜理全所事務，対于外界為公所之代表，副董事四員輔之（坊，局各二人）。正董事有事不到時，即由副董事代理。」。

「乙，推挙議董八員（坊，局各四人），毎日午後到所会議応弁各事。凡評議同業交渉事件或有徇私偏袒情事，…」。

「丙，推挙会計董事一員，管理所中統年度支預籌銀銭出入，収執産業契据等務。」。

㊾同書，「第十九条　本公所正副董事・議董・会計董事及調査幹事・査賬・糾察・列表等員皆一年一任，任満另挙。惟続被挙者，仍可連任。或因事不克終任者，公同続挙。」。

㊿同書，「第十三条…凡開議時応以正董事為主席，副董・議董到場者，須有過半之数，否則不得開議。」。

(61)譚汝謙「中日之間訳書事業的過去・現在与未来」（同主編，小川博編輯『中国訳日本書綜合目録』，香港，中文大学出版社，1980年）。

(62)神戸貿易調査会編『日清通商便覧』（1904年）。

(63)農商務省商務局編『1911年，支那貿易の概況』（1912年）。

(64)東亜同文会調査編纂部『第一回支那年鑑』（1912年）。

(65)同書には，また清国から海外諸国へ輸出された書籍の価額が記されている。これによれば，1908年212,901両，1909年229,943両，1910年295,615両とあり，輸入額の３分の２ないし２分の１の少額であった。

(66)日清貿易研究所『清国通商綜覧』（1892年）。同書第一編第一門商業地理第三章廿五港上海の条（113—117頁）に，明治22年（1889年）当時の上海における輸出入額が品名別に記されている。「輸出の部」の書籍の項を見ると，「外国へ輸出」が3,991両，「香港諸外国支那各港へ再輸出」が25,190両，「輸出総計」が365,754両となっている。そして「輸入の部」には書籍の項はない。これらだけを見れば，多額の書籍が上海から海外へ輸出されていたようだが，実際はそうではない。すなわち「輸出の部」には，「香港及支那各港へ輸出したるものは此表に記載せず，若し之を知らんと欲せは其上記二欄の両輸出額を引き去るときは則ち得べし」と註記があり，上海から清国内の他の諸港への流通額も輸出の中に含まれているのである。したがって上記の註にもとづきその額を求めると336,573両という数字が得られる。「外国へ輸出」をⒶ，「香港及支那各港へ輸出」をⒷ，「香港諸外国支那各港へ再輸出」をⒸと置けば，次のように表現できる。

国内 ←Ⓑⓑ— 上海 —Ⓐⓐ→ 海外

国内 ←Ⓒⓒ—（上海）←Ⓒⓒ— 海外

Ⓐ3,991両＋Ⓑ336,573両＋Ⓒ25,190両＝365,754両。

(67)外務省通商局『清国事情』二冊（1907年），第一輯第三巻第六章貿易，第一節上海ノ貿易の条，「輸出品ノ重ナルモノハ左ノ如シ但シ三十七年度分（単位海関両），…書籍1,143,032…」輸出品とはいっても，上海から海外及び国内諸港に動いた額であり，前註(66)の例に従えば，海外へよりも清国内の諸港へ流通した書籍の方が圧倒的に多かったと推測される。

㊽前註㊸『文明小史』，第17回「老副貢論世発雄談　洋学生著誇秘本」の条，

姚文通眼看胡中立馬車去了一段路，方纔進来，同店主人扳談，問他新近又出了小些什麽新書？　店主人道「近来通行翻訳書籍，所以小店裏特地聘請了許多名宿，另立了一個訳書所，専門替小店裏訳書。訳出来的書，小店裏都到上海道新衙門存過案，這部書的版権一直就帰我們，別家是不准翻印的。」。

㊾呉沃堯『二十年目睹之怪現状』(1906～10年刊)，第72回「逞強頃再登幕府　走風塵初入京師」の条，

我又看見他書架上庋了好些石印書，因問道「此刻石印書，京里也大行了？」那人道「行是行了，可是売不出価銭。従前還好，這両年有一個姓王的，只管従上海販了来，他也不管大衆行市，他販来的便宜，就透便宜的売了，鬧的我們都看不住本銭了。」我道「這姓王的可是号叫伯述？」那人道「正是。你停認得他麽？」我道「有点相熟。不知道此刻可在京里？住在甚麽地方？」那人道「這可不大清楚。」我就不問了。

関西大学 史学・地理学会
昭和63年度収支決算報告書

			平成元年度
収　入	2,289,349円		1,254,445円
前年度より繰越	843,917円		222,445円
会費	1,372,000円		1,032,000円
史泉売上	39,940円		
レジュメ売上	16,800円		
利息	16,692円		
支　出	2,289,349円		
事務費	90,751円		
史学・地理学会大会費	153,273円		150,000円
史泉 68号 69号	1,585,700円	史泉70号	597,606円
郵送料	77,400円		747,606円
振込用紙ほか印刷代	27,180円	残	506,839円
事務員謝金	132,600円		
来年度への繰越	222,445円		

平成元年12月２日の総会において，会費の値上げ改正案件（平成２年度から，会年費2,000円を2,500円とする）が承認されました。財政悪化に伴い，運営に難渋を極めておりますのが実情でありますので，何卒よろしくお願い申し上げます。なお，会費納入は前納を前提としておりますので併せてお願い申し上げます。